発達障害等のある大学生の利用状況
～大学および地域連携の状況について～

○ 白崎　裕美（千葉公共職業安定所　雇用トータルサポーター）
山本　恵美（千葉公共職業安定所　専門援助部門　統括職業指導官）
矢野　健三（千葉公共職業安定所　就職支援ナビゲーター）

特別支援チームによる就職活動に困難な課題を抱える学生等への就職支援

1 目 的

コミュニケーション能力の不足や対人関係の構築等に課題があり、面接不調により不採用が続いており卒業までに内定を得ることが困難な学生や、発達障害等のために専門的な支援がないと就職活動自体が困難な学生等に対して、特別支援チームを設置し、大学等と連携して支援対象者の早期把握を図るとともに、就職準備から就職・職場定着までの一貫した支援を行う。

2 事業実施体制

大学等

キャリアセンター

学生相談室 等 担当者

支援内容

事業の周知、参加希望者の把握

特別支援チーム支援への誘導

連携・調整（就職支援協定締結）

①事業実施計画

②個人情報の相互利用・守秘義務

①支援が必要な学生の早期把握や就職準備支援実施のためのノウハウ提供

②キャリアセンター等の担当者向け障害特性の理解促進

ハローワーク

特別支援チーム

責任者（ハローワーク統括職業指導官等）

就職支援ナビゲーター（特別支援チーム分）

雇用トータルサポーター（大学等支援分）

公認心理師・臨床心理士（委嘱） 等

支援内容

インテーク面接、個別支援計画作成、同一の担当者による相談、適職の選択、応募書類の作成指導、事業所見学、模擬面接、対人技能向上トレーニング、職場定着支援、心理的サポート

支援対象者②・③の学生に対しては、障害特性に応じたカウンセリングや就職活動を行うための準備支援、福祉事業所等におけるインターンシップ、障害特性に配慮した専門的な職業相談・紹介も実施

支援対象者

①「コミュニケーション能力等に自信が無い」などの悩みを抱えており、面接の不調等により、不採用が連続しており、一体的・総合的な支援が必要だと大学等の職員等が判断した学生

②発達障害等があり（疑い含む）、障害特性に応じた専門的な就職準備支援がないと就職活動ができない学生

③障害があることを開示しての就職を希望している者

企業

雇用トータルサポーターによる専門的支援

・事業所見学、求人開拓、定着支援の実施

・発達障害者等を雇用した経験のない企業に対する理解促進

・発達障害等の学生を採用した企業への雇用管理に係る助言

※障害者雇用率達成指導と絡めた障害学生の職場実習やマッチング支援も実施

雇用トータルサポーターへ繋がるまで（ハローワーク千葉の場合）

大学

学卒ナビ（窓口）

新卒応援ハローワーク

学生

（依頼）（出張相談）

特別支援ナビ

（直接）

雇用トータルサポーター（TS）

連携

（支援依頼）

地域障害者職業センター
発達障害者支援センター
就労移行支援事業所
障害者就業・生活支援センター
企業
医療機関

臨床心理士　2名
（発達障害者雇用トータルサポーター　1名）
（精神障害者雇用トータルサポーター　2名）
（難病患者就職サポーター　1名）

チーム支援

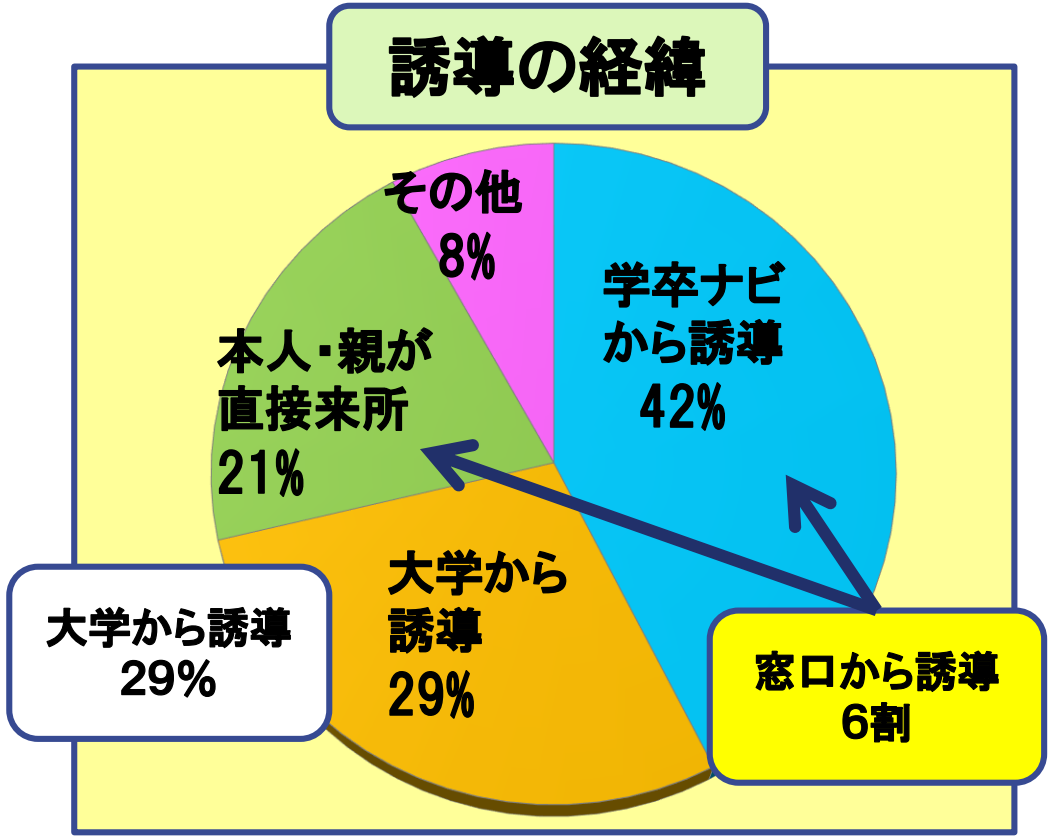
【支援対象者】
①発達障害等の診断を受けたことがある者で、就職準備支援が必要と思われる者
②障害特性に配慮した就職相談や職業紹介を希望する者
③診断は受けていないが、その特性が疑われ学卒ナビ、大学等から支援依頼を受けた者

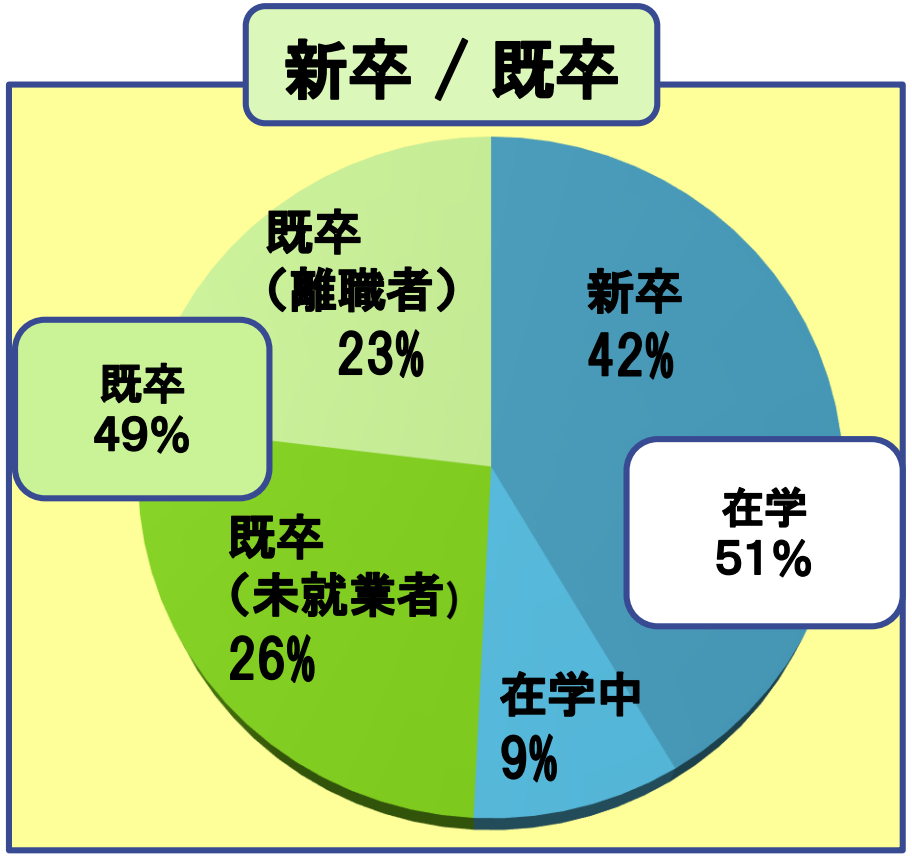
ハローワーク利用状況

（ハローワーク千葉の場合）

3

（令和4年8月現在）





※ 窓口からの誘導が大学からの誘導より多い

※ 新卒と既卒の割合が同程度

学生目線からの現状

4

Aさん

自分みたいな人間が
社会に出るのは迷惑
引きこもっていた

Bさん

親が障害の受容に
反対だった
（就職に不利、偏見を持たれるなど）

Cさん

診断を受け、「発達障害の傾向がある」と言われたが、 どうすればいいかわからなかった

Dさん

専門的な支援機関が
あることを知らなかった

・相談できない
・孤立、孤独
・情報不足

Gさん

授業で困っていても教員との
距離が遠く、相談ができなかった
学生相談室に話す内容ではないと
思った

Eさん

相談したいことをうまく言葉で
表現できなかった
言葉にするのに時間がかかり
迷惑をかけてしまうと思った

Fさん

障害者雇用がどういうものかを
知らなかった

学生目線からの要望

- 全員を対象とした個別面談（悩みを話すきっかけとなる場）
- 気軽に相談できる先輩やロールモデルとの繋がりをもつ機会
- 似たようなことで悩んでいる（同じ空気感をもつ）人と話せる場
- 自分にとって何が必要な情報か整理し教えてほしい

助けてもらいたいが、最初の一歩が踏み出せない
高校と同じように、一人ひとりに目が届くような支援が必要

支援者側から迎えにいくような支援（サービス）が求められている

NIVR

大学の支援者目線からの現状

グレーゾーンの学生への対応の仕方がわからない

本人から困り具合を発信してこない
実態を把握できない

Web授業が増え学生と非接触
メンタル不調に気づけない

SNS等で繰り返し連絡しても
全く反応がなく支援の手が届かない

本人の特性をどう見極めるか
わからない

気づきのない学生に
どう声かけすればいいのか？どう専門的支援に繋ぐのか

そもそも
何を以てグレーゾーン
とするのか？

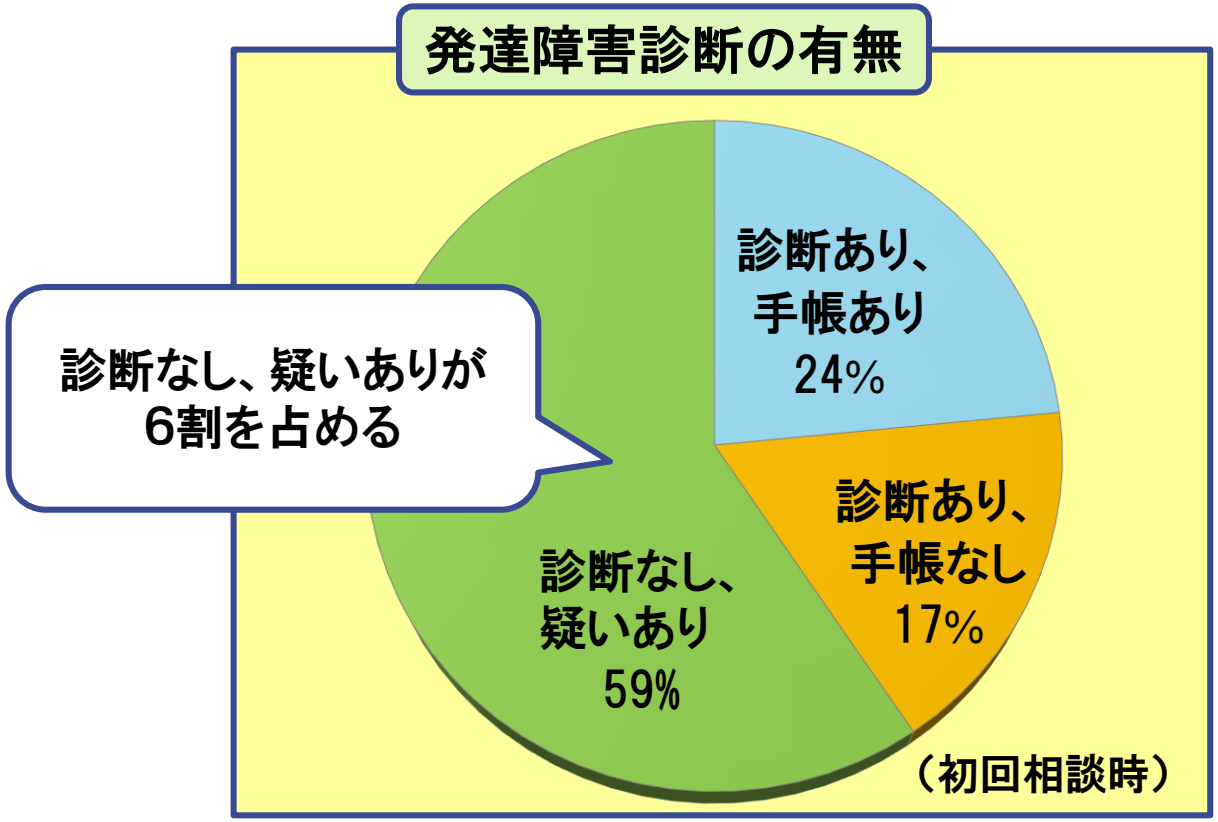
意思疎通が難しいために
表面上の対応
になってしまう

企業に迷惑がかかると思うと
インターンシップ先を決められない

発達障害診断の有無

（ハローワーク千葉の場合）

（令和4年8月現在）



※発達障害等診断の出ているものより疑いあり（グレーゾーン）が多い

大学（支援者）が困っているのは
グレーゾーンの学生への支援

NIVR

大学（組織）の現状と課題

8

- コーディネーター的役割をする人がいないため、関連部門間で共通認識がもてない
- 各部門ごとの情報共有のルール、守秘義務の縛りがある
- 教員と事務方で障害学生への理解・認識に差がある

実際の取組み（大学に対して）

▶ 支援の必要性を感じている部門を手始めに情報提供

⇒学外の関連機関を交えた座談会やセミナーを実施
職員の困り事に対し、具体的な事例をあげ対応の仕方を知ってもらう
関連機関のそれぞれの役割を知ってもらう

▶ 学生相談室／保健管理センター等と学外関連機関が連携・協働できるようサポート

⇒ケース会議等を設定、お互い顔の見える関係性を築く
⇒先駆的に動いている他大学の動きや、事例など情報提供
教職員向けセミナー（障害の特性理解など）等の参考にしてもらう

実際の取組み（本人に対して）

▶個別面談　→自分らしい生き方を選択できるよう支援
正しい情報の提供

▶障害者職業センターとの連携（主に職業評価）
→フィードバックに同席、本人、親御さんと共に課題を共有
親御さんとの関係性を築く

▶千葉市発達障害者支援センターとの連携
→生活面や家庭内の課題がある場合など随時助言をもらう

▶就労移行支援事業所との連携
→初回は見学同行し、通所後も月に一回面談を継続

NIVR

事例1 ～大学と他機関との連携～

・発達障害者支援センター
・就労移行支援事業所

Sさんプロフィール

・大学3年　理系　男
・大学1年次に休学あり(1ヶ月)
・診断：社会不安障害／
　　自閉症スペクトラム障害
・手帳　精神　3級

困りごと

当初の相談

・将来就職できるか心配
・対人関係が苦手(人前で体が震える)
・新しい環境に馴染めない
・考えがまとまらない
・親に心配をかけたくない
・眠れない

直面している問題

研究室に入れない　大学に相談できない
（手帳があることも伝えていない）

↓

発達障害者支援センターに大学の障害学生の支援体制について情報提供を求めた

↓

障害学生の支援申請を本人に促す
就労移行支援事業所の利用決定

↓

就労移行支援事業所と連携し
大学へのサポートを実施

↓

障害者枠で正社員　内々定

NIVR

事例2　～他機関との連携～

・発達障害者支援センター
・就労移行支援事業所
・医療機関

Kさんプロフィール

・大学既卒1年　男性
・IT系（SE）で就職
・1年で退職
・診断名：うつ病　（後にADHDと診断）

困りごと

・すぐ就職しないと親に怒られる
・親に迷惑をかけたくない
・もう失敗したくない
・集中力が続かない、作業が遅い
・不安が大きい、日中の眠気

実は

高校時、親に内緒で精神科受診（グレー）
（父親は受診を認めてくれない）

↓

面談を重ねる（医療機関の情報提供）

↓

エンパワメント

再度、本人の意思で専門医の受診を決意

↓

就労移行支援事業所と連携
（父親へのサポートを依頼）

↓

ADHDで診断が出る　手帳取得（精神3級）
障害枠で正社員採用（IT系）

まとめ

社会で求められる教育制度
のあり方が変容している

「教育」と「雇用」　繋ぐ仕組みの強化

教育機関における学校外機関との連携は転換期（取り組み始めている）

↓

いま、足りてない部分をどう補っていくか
（知識・スキル・予算・時間的余裕 など.）

↓

大学の教職員に専門人材が伴走しながら、共通の価値観を育てていく

『迎えに行く（雇用）』＋『一緒に橋を渡る（教育）』

ご清聴ありがとうございました